

別海町立上風連小学校 学校だより

上風連の子



No.13 平成27年2月25日(水) 発行責任者 校長 菊地 祐一

学校ブログのアドレス <http://www.aurens.or.jp/kids/>

「みんなちがって、みんないい」

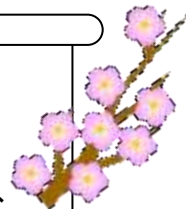
上風連小学校長 菊地 祐一

先日、5年生の補欠授業に入った時のことです。ふと机の上を見ると「童謡詩人金子みすゞ」という本が目に入りました。懐かしくなり、思わずページをめくりました。金子みすゞは国語の教科書にも載っている童謡詩人であるため、比較的子供たちにもなじみ深い人物。学級担任時代にこの金子みすゞの詩を、子供たちと何回も声に出して読んだことを思い出しました。彼女は、この世にある物を様々な角度から見つめ直し、それぞれ立場の違う視点で考え感じることで、地球上に存在する全てのものに対して、深く優しい眼差しを投げかけています。

今から4年前・・・あの東日本大震災直後に民法放送局が一斉にCM放映をやめ、代わりに流れていた映像の中に、金子みすゞの詩が引用されていました。きっと、憶えている人も多いと思います。その時の詩が次の「こだま」という詩でした。

『こだま』

「遊ぼう」というと「遊ぼう」という。「馬鹿」というと「馬鹿」という。
「もう遊ばない」というと「遊ばない」という。そうして、あとで、さみしくなって、
「ごめんね」というと「ごめんね」という。こだまでしょうか いいえ、誰でも。



この詩の最終連の「こだまでしょうか いいえ 誰でも」には、私たち誰もが備えている、自己の発言や行為を鏡のように忠実に映し見守っている、もう一人の自己を表現しています。子供たちも、日常の中で友達とのケンカや行き違い等で、このような経験をしています。もちろん、金子みすゞの伝えたかった深いところまで感じることは、子供たちにはまだ難しいかもしれませんが・・・。

今、世界では信じられないような悲惨な事件が多発しています。そんな時代だからこそ、金子みすゞが伝えたかったことを素直な心で読み、改めて心に響かせることが必要なのではないでしょうか。

正しい判断は相手と同じ目線に立って、自分と相手を入れ替えて考えない限りできません。全ての物事は互いに関わり合い、相互依存しながら存在しています。見られる存在を意識するのではなく、それを見ている人の心や意識が意味を与えているのです。金子みすゞは、当たり前なことを「なぜ？」と問い、それを「考える」ことが大切だとたくさんの詩を

通して私たちに伝えようとしているのです。子供たちが、これらの詩のように相手の立場に立って考え、相手と同じ目線で物事を見つめることができるよう、私たち大人も平等公平な目と心を持ち続けたいものですね。

『わたしと小鳥とすずと』

わたしが両手をひろげても、お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのように、地面をはやくは走れない。
わたしがからだをゆすっても、きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのように、たくさんうたは知らないよ。
すずと、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい。



『みんなを好きに』

私は好きになりたいな、なんでもかんでもみいんな。葱も、トマトも、おさかなも、残らず好きになりたいな。うちのおかずは、みいんな、母さまがおつくりなつたもの。私は好きになりたいな、誰でもかかれでもみいんな。お医者さんでも、鳥でも、残らず好きになりたいな。世界のものはみいんな、神さまがおつくりなつたもの。

